

# 平成 24 年第 5 回「市民のためのがん治療の会」講演会 協賛「食品と暮らしの安全基金」

## 放射線被ばくの本当の危険性

3・11の東日本大震災に続く福島原発事故後1年8カ月。巷には昨年12月の野田首相の「冷温停止で安全」との安全宣言に象徴される官製「安全情報」があふれています。そこで前々からチェルノブイリの実態調査を進めており、最近もウクライナ調査を終えて帰国され、《チェルノブイリ原発事故》第3回ウクライナ調査報告を公表された「食品と暮らしの安全基金」の小若順一代表の報告と、福島原発事故直後から、内部被曝の重大性を主張し、発言を続けている北海道がんセンター院長で当会代表協力医の西尾正道医師の講演会を企画し、かなりデータ等が整理されてきた今、何が真実かを皆さんと共に検証したいと企画いたしました。

日時：平成24年12月2日(日) 13:30~16:30

会場：タワーホール船堀 〒134-0091 東京都江戸川区船堀 4-1-1 電話 03-5676-2211

13:30	受付開始		
13:45~13:50	開会挨拶	市民のためのがん治療の会代表	會田 昭一郎
13:50~14:50	子どもの7割以上が食品汚染で病気ーウクライナ調査報告		
		「食品と暮らしの安全基金」代表	小若 順一
14:50~15:50	内部被曝の問題点	北海道がんセンター院長	西尾 正道
15:50~16:20	質疑		
16:20	閉会挨拶	「食品と暮らしの安全基金」代表	小若 順一

(都合により、日程、講師等に変更のある場合もございますのでお含みおき下さい。)

参加費・資料代 500円(「ウクライナ調査報告書」カラー版含む)

定員 100名(直接会場にお出ください)

内容についてのお問い合わせは下記あてにお願いいたします。

市民のためのがん治療の会 會田

FAX: 042-572-2564 email: com@luck.ocn.ne.jp

◎電話でのお問い合わせは御遠慮ください。

## <講演要旨>

### ◎子どもの7割以上が食品汚染で病気ーウクライナ調査報告

「食品と暮らしの安全基金」代表 小若 順一

チェルノブイリ原発事故が起きたウクライナでは、深刻な健康被害が発生している。ウクライナ政府は2011年4月、「未来のための安全」と題した報告書で、「健康な子は6%」と公表した。16%はときどき病気にかかる子で、慢性疾患のある子が78%いる。

2012年に、私は3度の現地調査を行った。3回目の調査で、さいたま市にある私の事務所の日常値と同じ放射線量の地域に行き、学校で子どもたちに「足が痛い子」と聞くと、7割の子が手を挙げた。この地域の食事は、放射性セシウムで平均10ベクレル程度、汚染されている。ということは、食事に年間0.05ミリシーベルトの被曝が加わると、子どもの多くに「痛み」が出ることになる。

放射能の基準は、日本も国際基準も、ヒトの「無発ガン量」を考慮して作成されており、ガン以外のことはほとんど考慮されておらず、化学物質のように100分の1にする安全率も掛けられていない。放射線は、盛んに分裂する細胞の遺伝子を傷つけるとガンを発生させる。

細胞分裂しない「非再生系」の組織や細胞が放射線で傷つけられると、ダメージを受けたのに回復できないから、心臓、脳、神経、筋肉などがダメージを受け、まず痛みを発すると私は考えている。

「ニトログリセリン」を持ち歩き、体のあちこちが痛かった26歳女性に、70日間、非汚染地で保養・療養してもらおうと、45日目から体調が良くなり始め、70日目には痛みがなくなって、ニトログリセリンを持ち歩かなくなっていた。日本でも、福島だけでなく、岩手から関東に住んでいる子に「痛み」の被害が出たら、一連の調査実験の知見が、診察と治療に役立つと考えている。

### ◎内部被曝の問題点

北海道がんセンター院長 西尾 正道

現在の放射線防護体系は広島・長崎の原爆被害を基に作成されている。調査された被爆者の定義は爆心地から2Km以内の者とされているため、2Km(この地点の推定被曝線量が約100mSv)以遠の被爆者は調査対象とされなかった。このためICRPとそれに追随する日本政府は100mSv以下は発がんのデータはないと嘘まみれの見解を述べている。また内部被曝や遺伝的影響は完全に無視し、原子力政策を推進する立場でのみ被曝の線量限度を決めてきた。しかし、チェルノブイリ事故後の被害や原発周辺地域の現実には深刻な健康被害をもたらしている。この現実をどう考えるのか。科学分析の原点は現実の現象を正視することから始めるべきである。講演では、①100~10mSv以下でも健康障害の医学的な証拠が多数存在すること、②低線量での細胞レベルでの異常報告、③内部被曝の問題の中で、不問に付され未説明の問題について報告したい。具体的な内部被曝の問題としては、

- 一瞬通過する外部被ばくと低線量連続被ばくの内部被曝の違い
- エネルギーの問題 (数eV~KeV~MeV)
- LET (Linear Energy Transfer, 線エネルギー付与)の問題  
高LET 順:核分裂生成物> $\alpha$ 線>中性子線>陽子線,電子線,X線, $\gamma$ 線
- 細胞周期と放射線感受性の問題 (G2・M期の細胞が影響大)
- 放射線影響の評価単位が不適切である問題(エネルギー換算による放射線量の問題)
- 線量の全身化換算の問題 などについて私見を述べる。

## <講師紹介>

### 小若順一(こわか じゅんいち)

NPO 法人『食品と暮らしの安全基金』代表。

1950 年、岡山県生まれ。1984 年に「日本子孫基金」を設立、ポストハーベスト農薬の全容解明など、食品の安全を守る活動の第一人者。

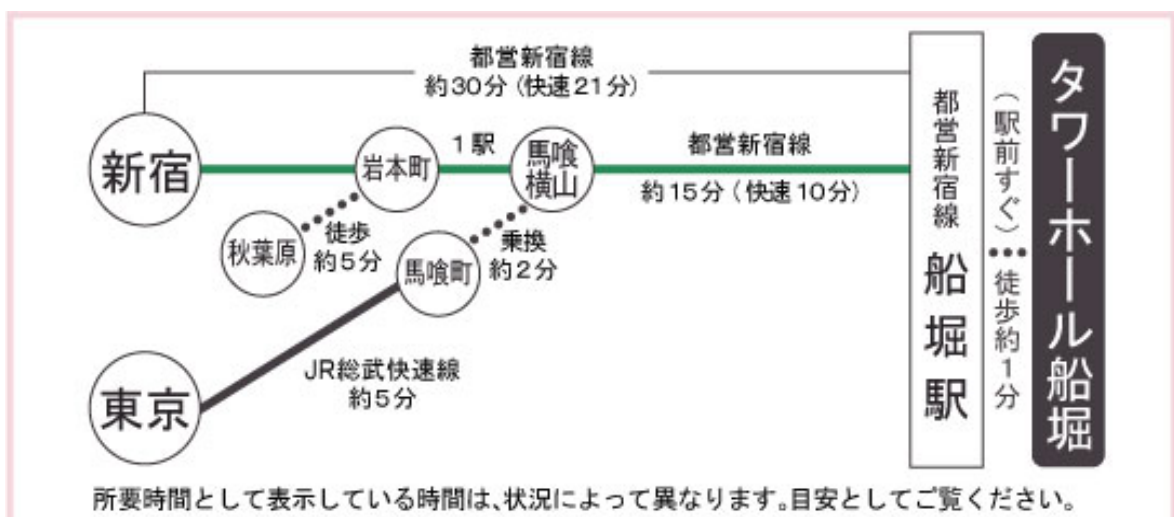
著書： 『食べるな、危険！』(講談社)、『食べ物から広がる耐性菌』(三五館)、『使うな、危険！』(講談社)、 『食べなきゃ、危険！』(三五館) 『食事でかかる新型栄養失調』(三五館)、 『放射能を防ぐ知恵』(三五館)、『生活防衛ハンドブック』(講談社 α 文庫) など多数。

### 西尾 正道(にしお まさみち)

1947 年北海道函館市生まれ。74 年札幌医科大学卒業後、国立札幌病院でがんの放射線治療一筋に 39 年。88 年同科医長。04 年 4 月、機構改革により国立病院機構北海道がんセンターと改称後も同院に勤務し現在に至る。豊富な臨床経験に基づき、日本のがん医療の問題点を指摘。改善するための医療を推進する。札幌医科大学臨床教授。日本医学放射線学会治療専門医。03 年 12 月から「市民のためのがん治療の会」の協力医代表。著書は『がんセンター院長が語る - 放射線健康障害の真実』(旬報社)、『放射線治療医の本音』のほか、多数。

## 交通案内

- ・新宿駅より「都営新宿線」にて本八幡方面へ約 30 分。船堀駅下車、徒歩約 1 分。
- ・東京駅より「JR 総武快速線」馬喰町駅にて乗換。馬喰横山駅から「都営新宿線」で船堀駅下車、徒歩約 1 分。



推薦します！

「食品と暮らしの安全基金」代表： 小若順一 氏

## 『低線量地域からの報告』

馬場朝子・山内太郎 著

定価 1,470 円(税込) / NKH出版刊

9月23日、NHK・Eテレで「ETV 特集 第2回・ウクライナは訴える」という番組が放映されました。信じられないほど多くの方が、放射線によって病気にかかっているウクライナの現状を、国の報告書とそれを執筆した医師などに取材しながら、現地の実情を紹介した素晴らしい番組です。この番組の取材記が『低線量地域からの報告』です。

NHK取材班は、第2種と第3種の汚染地が入り混じったコロステンを拠点に取材し、小若チームは、第3種と非汚染地域を拠点に取材しています。

地域が重なっていないので、『低線量汚染地域からの報告』と、『食品と暮らしの安全』と、『第3回ウクライナ調査報告』を合わせて読めば、ウクライナで起きている健康障害と病気の驚愕の実態がよくわかります。

ご紹介します！

国立病院機構 北海道がんセンター院長： 西尾正道 氏

以下の著書は、当会場ビル内のくまざわ書店さんにて販売しております。

ぜひ、ご一読ください。

## 『内部被曝からいのちを守る』

～ なぜいま内部被曝問題研究会を結成したのか

市民と科学者の内部被曝問題研究会：編 定価 1,260 円/旬報社刊

これから私たちは、どう内部被曝と向きあっていくのか。市民と研究者・専門家がいっしょになって「これから」を考える。様々な立場と見識。共通の願いと希望を実現するために、私たちができることはなにか。好評のブックレット。



## 『がんセンター院長が語る 放射線健康障害の真実』

西尾正道 著 定価 1,050 円/旬報社刊

年間 1000 人もの患者を治療してきた現場で活躍している医師が、放射線治療の立場から明らかにする事実。知っておきたい知識、理解されにくい被ばくへの対応や問題など、私たちにわかりやすく語るブックレット。各地の学習会で参考図書としても活用されています。